



大学教育の多様化に備えて

巻頭言

藤澤俊男*

昨今は昭和67年度にピークを迎える高校卒業生の急増に対応する臨時増募の問題で全国の国公立大学は頭を痛めている。しかしながらその後は他の先進諸国と同様に高校卒業生数は長期低落の一途を辿ることになり、大学間の競争は激しくなり、縮小、閉鎖に追いこまれるところも出ると云われている。従って、大学教育のあり方は目先の対策でなく長期の視点から検討されるべきものであろう。

大学はこれまで高校卒業生を freshman として受入れ、4年間の学部教育で世の中に送り出すのを主務としてきた。しかしながら最近では“開かれた大学”として広く社会人を受入れることに対する要望が強くなりつつある。これは特に技術革新の速い分野での強い要望である。教育者の立場からも、大学を就職までの通過駅と考える意欲のない学生よりも、学習意欲の強い目的意識を持った社会人の方が教えがいがある。従って、大学の社会人への開放は急速に進展していくであろう。

社会人の教育にはこれまでになかった種々

の問題がある。高校卒業生を輪切り試験でとると、一応水準はそろっている。明治以来の教室での一斉授業でまあなんとか教育できる。しかしながら、社会人はそれぞれにちがうバックグラウンドを持ち、目的も様々である。とても一斉授業で足りるものではない。それぞれに適した教材を与え、個人指導をていねいにしなければならない。このような多様化はどのようにして実現できるものであろうか。幸い、これからは高度情報社会である。VTR、ビデオディスク、CAI などを活用することによって多様化する教育ニーズに対応することになる。現在のところは、教育のソフトは先生方の頭脳の中に埋蔵されていて、利用できるソフトウェアの形にはなっていない。データベースの構築と同じようなもので今からはじめて10年にかかる。これができないうちに大学を開いても中途半端になり実効はあがらない。これからの10年は大学教育の変革に対応するソフトウェア蓄積の時代である。

*藤澤俊男 (Toshio FUJISAWA), 大阪大学, 基礎工学部, 情報工学科, 教授, 基礎工学部長, 工学博士, 情報・通信工学